台湾人権の歴史について

彰化師範大学　魏培軒

@9月8日小松先生ゼミ

世界で最も長く続いた戒厳令のひとつは、どこで何年続いたか。

台湾、1949年5月20日～1987年7月15日（38年）

戦前の台湾人権

台湾の人権史は台北中心に語られがちだが、彰化を含む中部は、植民地期の社会運動と戦後の武装抵抗の双方で重要な舞台だった。

◎　二林蔗農事件（1925年）　彰化県二林で、製糖会社に対しサトウキビ農民が組織的な争議を起こし、多数が検挙された。台湾で最初期の農民運動とされる。

◎　賴和（1894–1943）　彰化の医師であり「台湾新文学の父」と呼ばれる作家。植民地期に二度投獄された。彰化市内に記念館がある。


二林高等女學校紀念撮影

戦前の台湾人権

二林地区出身の医師である李応章らが中心となり、甘蔗農民らの力を結集すべく農民大会が開かれた。農民の要求は林本源製糖会社に拒絶され、同社は日本の警察に事件への介入を依頼した。10月22日、林本源製糖会社が刈り取りと強制買付けを実行しようとすると、二林地区の甘蔗農家がこれに反発し、警察との衝突に発展した。農民は警官のサーベルを奪い警官9名が負傷する事態となると、警察は甘蔗農家及びこの運動を支持していた台湾文化協会の構成員の逮捕に踏み切った。逮捕者には、事件当時現場にいなかった蔗農組合の幹部も含まれ、逮捕者総数は400名にも及んだ。

事件後日本労農党の布施辰治、麻生久の2名の弁護士が台中に駆けつけ応援した。また台湾文化協会の蔡式穀等も出廷して弁護した。逮捕者400名中25名が有罪となった。事件の中心人物となった李応章は1927年（昭和2年）4月に懲役8ヶ月の有罪判決を言い渡されている。

戦前の台湾人権

頼和の文学作品では、植民地支配を受けている台湾人が貧しい生活に苦しんでいる実態を暴き、 日本の植民地政策を批判する一方、「近代」というものが本当に台湾人に幸福を与えるものなのか、台湾人をどのように変えていくべきかを問い続けました。階級問題のみならず、作品の中にもつねに弁証的な書き方で、台湾人固有の「国民性格」、改造された民族性についての思考、または台湾の知識人の役目に関する自省の念 なども表しています。日本統治期の台湾文学には、「隠忍」と「反抗」という二つの思想がうかがえますが、この二つの思想は、台湾新文学の父である頼和の作品のなかにも深く刻み込まれています。

戦後悲劇の開幕（1945～1949）

◎　1945年　日本の統治が終わり、中華民国が台湾を接収。行政長官公署による統治が始まる。

◎　1947年2月28日　闇タバコ取締をきっかけに台北で衝突が起き、全島に拡大。各地で「二二八事件処理委員会」が結成され自治的な要求が出されたが、大陸から派遣された部隊による鎮圧で多数が犠牲となった。1992年の行政院報告は死者を約1万8千～2万8千人と推計している。



終わらないテロ統治（1949～1987）

◎　国共内戦に敗れた国民政府が台湾へ移る。5月20日に戒厳令が布告され、「懲治叛乱条例」「戡乱時期検粛匪諜条例」によって、密告・軍事裁判・思想犯の摘発が制度として組み込まれた。

◎　多くの事件は軍法会議で処理され、弁護権や上訴はほとんど機能しなかった。読書会への参加、書籍の所持、家族や知人との関係 だけで有罪となる例が多い。

◎　政治犯は台東県沖の緑島などに送られた。促進轉型正義委員会がまとめた記録では、権威主義体制期の政治事件の当事者は2万数千人にのぼり、うち死刑を執行された人は1,000人を超えるとされる。

民主化への移行（1970年代～1996）

◎　抵抗の系譜　彭明敏 らの「台湾自救運動宣言」（1964）、雑誌『自由中国』事件（1960）、そして美麗島事件（1979）。美麗島事件の被告を弁護した若手弁護士たちが、のちの民主化を担う政治家となった。（陳水扁、謝長廷、蘇貞昌、張俊雄、尤清など）

民主化への移行（1970年代～1996）

◎　1980年2月28日、林義雄（リン・イーシオン）は台北景美軍法看守所で裁判を待っていました。その日、台北の警察と情報要員は彼の信義路の自宅前で終日見張りに立っていましたが、誰も中に入りませんでした。夕暮れになってようやく発見されたのは――60歳の母、林游阿妹が地下室で13カ所を刺されて倒れており、7歳の双子の娘・林亮均と林亭均は胸から背中に貫通する一刺しを受けて即死していたのです。9歳の長女・林奐均は六カ所の傷を負いながら、背中にランドセルを背負っていたために奇跡的に一命を取り留めました。
その日は二二八事件（にに・はちじけん）から33周年でした。犯人は今も不明のままです。

民主化への移行（1970年代～1996）

- 1979　出来事 美麗島事件 – 党外運動への大規模弾圧が、かえって支持を広げる
- 1986　民主進歩党が、まだ非合法の状態で結党
- 1987　戒厳令解除（7月15日）
- 1990　野百合学生運動 – 国民大会の全面改選を要求
- 1991　動員戡乱時期の終結、懲治叛乱条例の廃止
- 1996　初の総統直接選挙（李登輝当選）
- 2000　初の政権交代（陳水扁当選）

民主化への移行（1970年代～1996）

◎　移行は、統治側の判断だけで説明できない。党外運動、学生、教会、海外の台湾人ネットワーク、国際世論という複数の圧力が重なった結果である。同時に、流血の革命ではなく、選挙と法改正の積み重ねによって進んだことが、比較政治学で台湾が注目される理由でもある。

◎　市民社会からの自発的な社会運動、エリートの自覚、知識人と国民との連動

移行期正義と現在（1987～）

- 1995　二二八事件処理及び賠償条例。李登輝総統が国家元首として謝罪。
- 2009　国際人権規約（自由権規約･社会権規約）を国内法化。
- 2018　国家人権博物館が開館（白色テロ景美記念園区・緑島記念園区）。同年、促進轉型正義委員会が発足。
- 2020　監察院に国家人権委員会が設置された。

移行期正義と現在（1987～）

◎　未完成と不徹底性：
2024年には5月19日が「白色テロ記憶日」に定められた。他方、管理対象となっている蔣介石像などの権威主義的象徴941件のうち、2025年4月末時点で処置が済んだのは264件にとどまる。加害者の責任追及も、ほとんど進んでいない。
◎　謝罪も、補償も、博物館もある。それでも「終わらない」のはなぜか。

移行期正義と現在（1987～）

- 加害者なしの正義はどのような正義だ？
- 「銅像を撤去することは、歴史を消すことでしょうか。
  それとも、歴史と向き合うことでしょうか。」
- 全国憲法研究会の和田英夫、進撃の巨人の調査兵団
- 二つの正反対の立場：国内で党派的争点
- 忘れたほうがいい？束縛せずに真新しく出発したほうがいい？
- 若い世代の歴史認識にどう作るか？またどう作りすべきか？